

年月日

19
10
18ペー
ジ

27

NO.

今年のベネチア国際映画祭のコンペティション部門オープンニング作品に選ばれたのは、現在公開中の是枝裕和監督の国際共同製作作品『真実』だ。日本人監督がオープニングを飾ったのは史上初の快挙だ。

昨年カンヌ映画祭でパルムドールを受賞し世界の注目を集めた是枝監督が、新作に出演のカトリーヌ・ドヌーヴやジュリエット・ビノーシュに囲まれてレッドカーペットを歩く姿を目にした方もいるのではないか。どうか。

作品は、国民的大女優の母（ドヌーヴ）と女優を諦めて脚本家となつた娘（ビノーシュ）の確執と和解を描いたもので、是枝監督の得意とする家族の物語である。母国語でない言葉の映画を異国で撮影するという初めての試みで、脚本も監督が自ら担当した。

△デザインのチカラ△

⑫



是枝裕和監督の国際共同製作作品『真実』（写真：©2019 3 B一分福—MI MOVIES—FRA NCE 3 C INEMA。配給ギャガ）

については特に気を使うそ
うだ。それは、13年公開の『そして父になる』の中で、ピアノ音が効果的に使われていたように楽器の音であったり、料理の音であったりとさまざまだが、随所で私たちの心を揺さぶる。どの作品においても、特に料理のシ

スクリーンから香りこそ
伝わらないのだが、料理をする音が私たち観客の脳を刺激し、それぞれが記憶の中に持つその料理の匂いを思い出させる。音に限らず、五感に訴える緻密なデザインが映画作りにおいて、是枝監督は五感を大切にす

は大きく感情を振り動かされるが、これは視覚や聴覚から脳への伝達が行われて、人の記憶と結びつき感情を振り動かすからだ。音楽を聞いた時や香水の匂いを嗅いだ時にも同様のことが起きる。

これからモノづくりにおいては、脳に働く五感の特性を理解し、デザイン・エディター

五感に訴える映画作り

り求められるだろう。

パリを舞台に繰り広げられる家族の物語は、た

つた7日間の出来事を追

つている。母の館の紅葉は秋という季節だけではなく、大女優の人生の晩年と移ろいゆく家族の形の象徴的役割を果たす。

纖細な音楽とともに私たちの五感を喚起し、印象派の絵画を見た後のように余韻を与えてくれる。

（西谷直子・三井デザ

インテック・コミュニケーション・エディター）